

Toward the Opening of the Musashino Literature Museum

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土屋, 忍 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/591

「武蔵野文学館」開館をめざして

土屋 忍

「武蔵野文学館」開設までの前史については、松村武夫先生が「武蔵野文学館」開設について（『武蔵野日本文学』第十六号、二〇〇七・三）と「武蔵野文学館開設をめざして」（『武蔵野日本文学』第十七号、二〇〇八・三）で書かれている。ここでは、それらを引き継ぐ形で経緯を記し、近況報告としたい。

二〇〇六（平成十八）年十一月八日、「武蔵野文学館」準備室発会式がおこなわれた。前掲「武蔵野文学館」開設については、発会式の際の署名一覧も載っている。二〇〇七（平成十九）年度には、武蔵野校舎に準備室が設けられ、パソコンや机、本棚が置かれた。そして二〇〇八（平成二十）年十月二十九日、「武蔵野文学館」発足式が催され、正式に開設することとなった。その後

は、開館をめざして、様々な活動がおこなわれた。

二〇〇八（平成二十）年度の『武蔵野日本文学』第十八号（二〇〇九・三）では、「武蔵野特集——「武蔵野学」構築に向けて①——」を組み、特集論文を五本掲載することができた。「武蔵野学」とは、現在展開中の「八王子学」（中央大学）や「コミックいわて」（岩手県）に先行する発想である。「東北学」（東北芸術工科大学）や「京都学」（立命館大学）の後塵を拝すようにも見えるが、『武蔵野日本文学』第二号（一九九三・三）における「特集 武蔵野と文学」に収められた六本の論文などをみると、用語こそなかったものの「武蔵野学」に通じる蓄積がすでにあったことがわかる。

二〇〇八～二〇〇九（平成二十～二十一）年度には、

元教授の秋山駿先生から寄贈された五八二五点の資料を整理するために、「(武蔵野文学) に関する基礎的・総合的研究——秋山駿を中心に——」というテーマで学院特別研究費を申請し、採択された。二年間の主な成果物として以下の四点があり、順次、本紀要にも掲載する予定である。

- 一、秋山駿文庫 目録 二〇〇八年十一月作成
- 一、秋山駿文庫 貴重書目録 二〇〇八年十一月作成
- 一、秋山駿 著作年譜(暫定版) 二〇〇九年十二月作成
- 一、秋山駿 単行本未収録資料一覽(暫定版) 二〇〇九年十二月作成

あわせて二〇〇九(平成二十二年)年度には、土岐善麿著作年譜と黒井千次著作年譜、単行本未収録資料各一覽などの作成も開始し、関連して「(武蔵野文学) 研究会」(代表者・土屋忍)を開催した(計六回)。その成果の一部「土岐善麿著作年譜(二)」が今号に掲載されている。また「東歌研究会」(代表者・並木宏衛)が開催

され(計五回)、その成果は本紀要の次号に掲載予定である。このように、古代から現代までを視野に入れた文学館は世界でも珍しく、文学部を擁する大学の附置機関だからこそ展開できることだといえよう。この点は、今後、武蔵野文学館の大きな特徴のひとつとなるはずである。

同じく二〇〇九(平成二十二年)年度には、武蔵野市の協力にも恵まれ、寄附講座「(武蔵野)の記憶と現在——日本語・日本文学からの発信——」を企画・開催し(全十四回)、学科の総力を尽して「武蔵野学」に関する多様な研究成果を公開する機会となった。この企画は、同じく寄附講座「(武蔵野)の記憶と現在——日本語・日本文学からの第2信——」(全十六回)として翌年に引き継がれることになり、さらに同二〇一〇年後期には、武蔵野地域自由大学からの依頼により、「武蔵野の記憶と現在——古典文学を中心に——」(全六回)が実施された。なお、武蔵野市による二回の寄附講座に関して、それぞれ武蔵野大学出版会より二冊の講義録が刊行されている。また二〇〇九年十一月には、三鷹市による

太宰治生誕百年企画に関連して、『三鷹という街を書く
太宰治 陋屋の机に頬杖ついて』(Dioの会編、はる
書房)が刊行され、宮川健郎先生と土屋忍もエッセイを
寄せている。

二〇一〇年度には、これまでの成果を本学の学生に
も集中的に還元すべく、講義科目「武蔵野学」を開講
し、日本語・日本文学科のカリキュラムの中にも組み込
んだ。また同年には、鼎談(廣瀬裕之・宮川健郎・土屋
忍)「武蔵野に新しい価値を与えたマルチクリエーター、
国木田独歩」が武蔵野文学館準備室にておこなわれ、季
刊『むさしの』2010年夏号に掲載されるなど、幸
いにも、「武蔵野文学館」開館に向けての外的環境は、
徐々に整いつつある。そうした中で、武蔵野文学館準備
室学生スタッフ有志が集い、武蔵野大学の学園祭である
摩耶祭期間中(十月二十二〜二十四日)を活用して、企
画展示「土岐善磨・秋山駿・黒井千次——武蔵野の教壇
に立った文学者——」をおこなった(詳細は、二〇一一
年三月刊行予定の図録を参照してほしい)。

最後に、今後の課題を述べておきたい。(ご承知のとお

り、武蔵野文学館は開設したが、「武蔵野文学館」はま
だない。「武蔵野文学館準備室」があるのみである。準
備室に常駐する教職員はなく、その活動は卒業生と学生
の有志によって支えられている。「武蔵野文学館」の開
設(二〇〇八年)について、各報道機関や他文学館、あ
るいは研究者への告知に努めてきたが、関連して学生有
志が中心になって作成、配布した小冊子『北海道文学旅
行記』(私家版、二〇〇八年、約百部発行)は話題を呼
び、日本近代文学会の「会報」でも紹介された。そうし
た活動を引き継いだ後輩たちが前記企画展示を運営し、
特に市民の好評を得た。「武蔵野文学館」の名前も、少
しずつ認知されはじめてきたと言えよう。

「武蔵野文学館」が誕生し、開館するであろう将来に
向けての助走は、まだ緒についたばかりであるが、この
たびの本紀要の創刊は、大変喜ばしいことである。これ
をひとつの足がかりとして、さらなる研究、調査、報告
に努め、開館への準備を粛々と進めていきたい。

(つちや・しのぶ 本学文学部准教授)